

## IV-3

多発性骨髄腫における骨髄組織内 von Willebrand Factor と COX-2 発現の臨床的意義

下間順子<sup>1,2</sup>、○松田 功<sup>1</sup>、前田 崇<sup>1</sup>、齋藤文護<sup>1</sup>、中牧 剛<sup>1</sup>、友安 茂<sup>1</sup>、瀧本雅文<sup>2</sup>、  
本間まゆみ<sup>2</sup>、塩沢英輔<sup>2</sup>、矢持淑子<sup>2</sup>、九島巳樹<sup>2</sup>、太田秀一<sup>2</sup>

昭和大学病院血液内科<sup>1</sup>、昭和大学病院第二病理学教室<sup>2</sup>

【目的】多発性骨髄腫では腫瘍血管新生やシクロオキシゲナーゼ 2 (cyclooxygenase-2 :COX-2)発現が負の予後因子として報告されている。これらは近年注目されている骨髄腫細胞と血管内皮細胞、間質細胞、破骨細胞等の骨髄微小環境での相互作用においても、重要な役割を担っていることが考えられる。今回我々は、多発性骨髄腫の骨髄標本を用いて、COX-2 発現と血管密度の相関および臨床的予後について、免疫組織学的に検討した。【方法】初診時の多発性骨髄腫 80 例のホルマリン固定パラフィン包埋骨髄標本を用いて COX-2 と von Willebrand Factor の免疫染色を行った。免疫染色の評価は COX-2 については、陽性率と染色強度をスコア化し、高発現群と低発現群に分けて検討した。血管密度については von Willebrand Factor の染色所見から一視野辺りの血管数の平均を Microvessel density (MVD) として求めた。【結果】COX-2 強発現群、弱発現群間では全生存率で有意な差がみられ、さらに COX-2 高発現群では、血管密度も増加している傾向がみとめられた。【結論】COX-2 が多発性骨髄腫の血管新生に関与している可能性が示唆され、近年注目されている骨髄腫細胞と骨髄微小環境をめぐるネットワークに COX-2 と血管新生が互いに影響を与えつつ、骨髄腫の病態に関与している可能性が示唆された。